

小水力発電を核にした石徹白の地域づくり

NPO法人地域再生機構 副理事長 平野彰秀

岐阜県郡上市白鳥町石徹白^{いとしろ}。ここは、岐阜県と福井県との県境、白山南麓に位置する山あいの小さな集落です。隣の集落から約14km離れており、標高950mの桧峠を越え、スキー場を2つ越えたその先にあります。私たちは、この小さな集落で農業用水を活用して小水力発電に取り組んでいます。

ことの発端は、2007年の夏。当時、東京に住んでいた私は、岐阜でNPOの活動をしている仲間たちとともに、この集落を訪れました。私たちの当時の関心事は、「持続可能な地球をつくっていくためには、持続可能な小地域をつくっていくことが大切。そのためには、農山村の豊富な資源を活用して、食・エネルギーをまかなっていく必要がある」ということでした。

はじめて訪れたこの集落で出会ったのが、「NPO法人やすらぎの里いとしろ」の人たち。私たちが、「小水力発電をやりませんか？」という話をもちかけたところ、「ぜひやってみよう」という話になりました。

彼らの話によれば、昭和30年代には、1,200人以上いた人口も、今では250人を切るまでになってしまったとのこと。過疎化が進むこの集落を将来につなげていくために、地域資源である水を活用して地域の活性化の起爆剤にしたいという思いから、石徹白での小水力発電の取り組みがはじまりました。

以来、試行錯誤を繰り返しながら、さまざまな小水力発電を導入してきました。最初は、海外から輸入した機械をつかって発電を試みましたが、ゴミが詰まったり電圧が安定しなかったりで、なかなかうまくいきませんでした。大学の研究者や、メーカーの人たちに協

力してもらったり、専門家にアドバイスをもらったりしながら、地域の人たちとともに取り組んできました。

現在、稼働している小水力発電機は全部で3機です。街灯をまかなうごく小さな規模のもの、住宅一軒をまるごとまかなう規模のもの、そして、公共施設(農産物加工所)の電気の一部をまかなうもの。

小水力発電の導入は、この地域に、さまざまなものをもたらしています。1つめには、小水力発電の取組みが報道されることで、多くの方に、石徹白の名前を知っていただくようになりました。2つめには、移住者の増加です。2011年度には、4世帯9名が移住しました。なかには、小水力発電がきっかけで移住した人もいます。私もその1人です。

3つめには、小水力発電の導入にともなってさまざまな地域づくりの活動が行われるようになりました。小水力発電の電気が供給されている「農産物加工所」は、2年前までは休眠状態にあった施設です。小水力発電が設置されるのと同時に、農産物加工所での特産品開発がはじまり、加工所が稼働するようになりました。また、若嫁さんたち有志があつまって、地元食材を活用したカフェをはじめようになりました。すべての活動が小水力発電がきっかけというわけではありませんが、小水力発電の存在が地域づくりの活動に活力をもたらしていることは間違いありません。

3年後には、100kW近くの小水力発電所を建設し、地域のエネルギー自給率100%以上を実現することが、当面の目標です。

(ひらの あきひで)